いまこそ、「きっぱり廃止」の世論を！

～教員免許更新制をめぐって～

野村　幸司

「教育基本法」改悪を強行（2006年）した第一次安倍政権が、その具体化として導入したのが「教員免許更新制」です（2007年に法改正、実施は2009年より）。「不適格教員の排除」を口実とした導入でしたが、教員統制につながる懸念、更新講習の受講機会の確保・講習内容の問題、教員の大幅な負担増（時間的・経済的）、免許失効に伴うトラブル等、様々な問題が指摘され、幅広い反対の声が巻き起こる中での強行でした。

安倍総理の突然の辞任後に誕生した民主党政権は、その「マニュフェスト」に免許制度を「抜本的に見直す」とうたったものの見直されることはありませんでした。

それから12年。教員の負担増、「うっかり失効」、未更新による教員不足等々、予想された問題が次々と生じてきました。そして、教職の多忙化とそれに伴う深刻な教員不足が重大な政策課題となる中で、制度自体の破綻が明らかになり、この夏遂に免許更新制は「廃止」に向かって大きく動くことになりました。

「教育新聞」は8月23日に、次の様に伝えました。

◇　◇　◇

中教審の教員免許更新制小委員会は8月23日、教員免許更新制について「『新たな教師の学びの姿』を実現する上で、阻害要因となると考えざるを得ない」として、「発展的に解消することを文科省において検討することが適当である」とする審議まとめ案を了承した。これを受け、萩生田光一文科相は同日、来年の通常国会で必要な法改正を行い、再来年から教員免許更新制を発展的に解消し、各教育委員会が研修履歴を管理する新たな教員研修制度に移行させる考えを表明した。これにより、2009年度に始まった教員免許更新制は廃止される。

◇　◇　◇

もっとも、きっぱり「廃止」に向かうかどうかは注視する必要があります。自民党の中には「廃止」に対する異論が少なからずあるようです。「廃止」するにしても、その後の「研修の義務付け」強化を求める声も上がっています。

9月27日に開かれた中教審の「合同会議」では、早速次のような意見が出ています。

「現場から聞こえてくるのは、教員免許更新制の廃止への期待とともに、『発展的解消』というこの文言への不安だ。新制度ができて、研修をいっそう徹底させられるのでは、勤務環境が厳しくなるのではないかと表面的に伝わることを大変危惧している」

（埼玉県戸田市教育長）

「免許更新制に代わってまだやらされる、義務付けられるような感じで受け止められるのはよろしくない。うまく伝わるよう、われわれも考えていかなければならない。教師の成長の中で、研修がどう位置付くのかということも、大きな視点から（審議まとめに）書いていくべきだ」

（兵庫教育大学長）

今こそ、「きっぱり廃止」の声を広げていかなければと考えています。

高知県母親大会全体会 幡多会場の様子

川村喜美

初オンラインの会場の一つが四万十市の安並武道館会議室で、幡多地域の参加者で視聴しました。講師が地元の山下正寿さんであることもあって、「宿毛市在住の山下正寿さんの講演を幡多地域から盛り上げよう」「核兵器禁止条約が国際法となった本年。幡多地域からも協力をしよう！」と、オンラインでの集団視聴参加を呼びかけました。

しかし、コロナ急拡大の中で、個人視聴主体に方針転換し、集団視聴としては15名を予定しましたが、当日は予定を上回る20名に参加していただきました。高退協会員5名の参加もありました。

初めてのオンライン操作とあって緊張しましたが、川渕誠司さんご夫婦が全面的に担当してくださいました。途中、本部の切り替えの問題などがありましたが、何とか最後まで視聴することができました。川渕誠司さんご夫婦には本当に感謝です。ありがとうございました。

山下正寿さんの講演は大盛況で、幡多会場では次のような声が寄せられました。

○山下正寿さんの知識・行動力のもとになっているものが何なのかを知ることができた。

○山下さん、えらい人だと思っていたが、それ以上でした。彼の底にある哲学に感動した。

○〝権力と闘うこと〟これは全ての運動の根本にあり、全てがつながっている。一つの問題を深く学び、活動に参加することは運動の全体を知る窓であると、知った。そして、〝楽しく闘う〟これが大事。

「生命を生み、生命を守り育てる」母親運動の奥が深い。次の世代にしっかり真剣に、そして早急に繋げる課題を強く感じた。

記念講演をオンラインで。山下正寿さん
高知城ホールにて

夫婦別姓について思うこと その2

高教組教文部長　古畑邦明

「家族の一体感が失われる」「子どもがかわいそう…」夫婦別姓に反対する人たちの心配は本当だろうか？

夫婦「別姓」の我が家の中高校生に成長した子どもたちは、家庭内では姓を意識することはないので気にも止めないという。ただ、学校で「お前の家、別れたの？」などと言われたことはあったという。初耳だったが、彼らなりに嫌な思いもしたり、しまい込んできた記憶もあったかもしれない。長女にもう一つたずねた。「もし結婚したら姓を変える？」すると「変えないが6割かな？でも、相手の姓がカッコよかったら変えようかな。」とあっけらかんと応えた。

他の夫婦別姓の家庭の子どもたちはどうだろうか。NHKのEテレの番組「ウワサの保護者会」で夫婦別姓が取り上げられた。この番組の中で、もしも夫婦別姓が法律で改正されたら旧姓に戻したいという2人のお母さんが、その思いをそれぞれの子どもに打ち明けるという企画があった。子どもたちの反応はさまざまで、中学生の長男は「別にいいんじゃない」とそっけない返事。もう一人のお母さんの長男も「僕たちに関係ないし…」という反応。どうやら男の子たちはあまりイメージできない様子。一方、長女の反応はそれとは異なり「できれば戻さないでほしい。名字が違うと家族がまとまっていない感じがする。」と具体的だ。そこでお母さんが長女に「自分が結婚するときに名字を選べるとしたらどっちにする？」とたずねると、長女は「私はずっと今の苗字を名乗っていきたい。すごく親しみがある。」と答えた。自分の立場に置き換えたときにどう思うかという問いかけは、母の気持ちをより深く考えるきっかけになったと思う。

安倍政権が終わったとき、もしかして夫婦別姓が実現するかもしれない、と淡い期待を抱いた。改正されれば晴れて結婚届を提出できる！これまで受けられなかった配偶者特別控除（年間40万円弱の控除を受けられない悲哀にあってきた）や諸々の不遇をようやく解決できると思ったが、甘かった。右傾化した今の自民党が政権を握る限り実現はほど遠い。

ここ数年、職場で女性の同僚の結婚が続いた。職場で吉報を告げる彼女らは「私事ですが、この度入籍いたしました。ただ、今後とも旧姓のままで仕事を続けたいと思いますので、よろしくお願いします。」と宣言した。そのとき「同志が増えた」とうれしい気持ちになった。教職員の中では旧姓を使い続ける女性がどんどん増えている。この流れが止まることはないだろう。皆が働きやすい職場であってほしいし、こうした夫婦や家族の0形を受け入れられる多様性を日本に根付かせたいと思う。

ウワサの保護者会　「夫婦別姓　子どもはどうなる？」（NHK 2021年6月26日 番組案内）
https://www.nhk.or.jp/hogosya-blog/100/450870.html#more

静かな歌曲

柳井卓コンサート

三谷隆彦

柳井卓氏作曲の歌を聴く音楽会が9月26日、追手前高校芸術ホールで開催されました。開演30分前、入り口では20～30人の行列ができました。感染症予防のためか体温測定、手指アルコール消毒を実施もしていました。会場内は過密を避ける工夫をしているが、それでも満席に近く女性客が多い。柳井氏は「コロナ禍にも拘らず、皆さん多数お出で下さいまして有難うございます」と丁寧な挨拶をしました。

16曲を拝聴しました。ソプラノ歌手梅原千世・山本友子、ピアノ伴奏大野日菜・北村真実・前田香織、フルート服部牧人の皆さんでした。聴衆は耳を傾けて聴き、松尾芭蕉の句を借りると、「静けさや脳に染み入る柳井の曲」。

まず詩を理解し、その詩の響きを作曲して歌うのであろう。ソプラノ歌手は歌の初めから終わりまで高音で歌うと私は思い込んでいましたが、じかに聴くと大きな間違いであることが解りました。ところどころソプラノで大部分低いアルトです。例えば高音部分をカタカナで表示すると金子みすゞ　詩『桃の花びら』なら「モモがおハナを」、佐藤春夫　詩『海辺の戯』なら「オトめのごとき」の調子です。語尾の高音は文字化が難しい。

16曲目の『あじさい』は素人でも歌いやすく、舞台上の歌手も聴衆も全員一緒に合唱すれば、感極まったであろう。

かつて柳井氏と同じ学校に私は勤務しました。彼の得意なのは声楽か楽器演奏か分からなかったが、作曲が専門でした。職員会で年度末に1日かけて反省会を持ちました。柳井氏は毎年教育全般の反省を求めました。その発言の誠実さには敗戦直後満州から引き揚げた苦労がにじみ出ている感じがしました。なお同氏について「高知の音楽支え年」と題して高知新聞9月26日付に葉書2枚の広さで掲載されています。

高退協学習会・交流会
高知城ホール
11月24日（水）
学習会　柳井卓（講演）
11時～
交流会
12時～